

2008年12月1日日本テレビ 定例記者会見

《 全文 》

＜発表＞

久保伸太郎社長：

はじめに新事業の紹介です。吉本興業、電通と提携して、私どものバラエティ番組と吉本興業製作のコンテンツを、動画サイトのJoostを通じて配信します。海外の動画サイトに日本の民放のバラエティ番組を配信するのは初めてのことです。バラエティは、日本テレビが長年力を入れてきているジャンルの1つです。「日本のバラエティは海外では通用しにくい」等、いろいろ言われてきましたが、これを突破口に色々取り組んでいきたいと思っています。

私どもは、地上波の番組を地上波に放送するだけではない、他の収入の上げ方を探っていかなければいけない、ということから放送外収入を目指す一環として取り組んでいます。

日本のテレビ番組に対する世界的な需要は非常に根強いものがあります。海外ニーズにどう応えていくかは、特に私ども制作力を持っているキー局に課せられた課題だと思っています。

これまでなかなか実現しなかったのは権利問題もありますし、番組内容によっては、なかなか受け入れていただけないものがありました。それよりも何よりも、国内の地上波の収入が非常に良かったので、そこまで手を回さなかったのだと思います。しかし、私どもは急にやり始めたわけではありません。日本のテレビ番組に対して世界的にしっかりした需要があることに基づいて、番組をそのままの形で販売する番組販売、番組の形式を販売する、いわゆるフォーマット販売、これらについても現時点でも力を入れていますし、今後も引き続き力を入れていきます。

次に、クリスマスイベントです。今年は、「TOYOTAプレゼンツFIFAクラブワールドカップジャパン2008」の開催日程の関係で12月5日からです。「シオドメの森 日テレホワイトロード」と名付け、会場を白いLEDイルミネーションで包みます。電球ではなくLEDを使用することで、節電、エコにも取り組みます。キレイな写真が撮れる撮影スポットも多く設置しました。幻想的な空間が汐留に現れます。こんなご時世だからこそ、このイベントで心を癒していただければと思っています。ぜひお出で下さい。

1. 今年1年を振り返って

記者：今年1年を振り返っていただき、来年への抱負をお話しください。

細川知正会長：今年1年は、中間決算にも表れているように、経済状況全体についても、私どもの経営にとっても極めて厳しい1年だったというのが、第一の実感です。

そして、そうであるだけに、今後やるべきこと、従来から言われていながらなかなかできなかつたことをやっていかないと、企業の存続にかかわるというところまではっきりわかつてき。具体的に言えば、放送収入の低下にコストコントロールが十分追いつかなかつた。新しい部門への進展が必ずしも十分でなかつた。1つひとつは着実に行われてはいるものの、スピード感が足りず、環境の変化に追いつけなかつたことを反省しなければならない1年でした。

したがつて、その反省に基づいて来年への抱負は、これらを着実にというよりスピード感をもつて実行、実現していくことで、業績の回復を進めなければならない。同時に、現在おかれているデジタル化の完遂など、当然やらなければならない基盤作りは着実にやっていくことが求められていると考えています。

久保社長：日本テレビは、1959年秋に上場しましたが、従来の中間決算、現行の第2四半期の決算で、上場以来営業収支ではじめて損失を計上しました。金額の問題ではなく、経営者としては、この中間決算で、本業の儲けを示す営業収支が損失となつたということについては、深く分析し、次にどう活かすかが課題と思っています。

私自身は、社長就任以来、視聴率のトップ奪還、放送収入のトップシェア奪還、自社のコンテンツ流通に関してのお客さまからの最大の支持を得るということを目標に掲げています。収入環境は、かろうじて踏ん張つて、落ち込み幅は小さく抑えていますが、非常に厳しい環境です。しかし、視聴率の改善は着実に進んでおり、その方向性については間違つていないと考えていますが、やはりスピード感が足りない。免許事業である放送事業は、メーカー各社とは立場の違う業種かもしれません、上場している以上、四半期別決算に対応して会社の体質も変え、より一層筋肉質にしていかねばと考えており、その体質改善のスピード感が決定的に不足していたと思います。

この点は、ライバル企業に大いに学ばなければいけないところもありますし、次の課題と認識しています。まさにピンチはチャンスだという、平凡な言葉ですが、それを念頭に取り組んでいきたい。

それから、番組に対しては視聴者、有識者から様々なご意見を頂戴しており、

その中には厳しいご指摘が依然としてあることも事実です。これについては真摯に受け止めて、改善すべきものは改善していきたいと受け止めています。とはいえ、マスメディアの一翼を担う私どもとしては、やはり表現の自由、報道の自由、言論の自由等、守らなければいけないものははっきり守っていかなければいけない。これは引き続き大きな課題だと思っています。

2. 最近の視聴率動向と年末年始編成方針

記者：番組改編の結果についての状況分析と、下期の視聴率の動向について、お話し下さい。

久保社長：番組の抜本的構造改革に取り組むということで、春と秋、4回にわたって、特にゴールデン、プライムの時間帯を中心に大幅な改編を実施してきました。その成果がようやく現れてきたと思っています。

私が強調したいのは、視聴率改善の中身です。私どもはかつて、10年連続で、視聴率四冠王、三冠王を獲得してきましたが、その後半には、視聴者層が若干高年齢層に偏っていました。なかなか思いきった番組改編に踏み切ることができないまま、高い視聴率を獲得するという状態が続きました。今取り組んでいる視聴率改善の構造改革とは、私どもの番組をできるだけ幅広い視聴者の皆さんに支持してもらえるような番組作りをするということです。単なる数値だけではなく、中身がよくなっていると、特にそこを強調したいと思います。

まだ曜日によっては、全然上昇気流に乗り切れていないところもありますので、むしろこれからだと思っています。

室川治久取締役：先週、先々週と、二週連続の四冠王獲得です。11月は月間四冠王も獲得でき、非常に順調に推移しております。年間平均視聴率および年度平均視聴率では、上位との差を着実に詰めています。2008年の下半期に関しては、現在プライム帯を除いて全時間帯でトップにあり、極めて順調です。

「NEWS ZERO」に始まり、朝帯、昼帯、そして今ゴールデン・プライム帯と、数年にわたって構造改革をやってきました。今のところ金・土・日は非常に強くなってきました。ここだけ見ればダントツの四冠王状態です。

さらに、月曜21時の「人生が変わる1分間の深イイ話」が伸びてきて、新しく始めた「しゃべくり007」も順調ということで、弱かった月・火・水が、少しずつ立ち直ってきました。あと火・水のドラマ等が今後の課題です。

先々週は、レギュラー番組の拡大で結構高い視聴率を獲っているんです。つまり、レギュラー番組が非常に強くなってきました。

また、先週は、開局55年記念番組を多数編成しました。「緊急中継！古代ローマ大発掘ＳＰ」や、明石家さんまさん・タモリさん・ビートたけしさんの三大MCのスペシャル番組を編成しましたが、それぞれ大変高い視聴率を獲りました、おかげさまで四冠王が獲れました。

11月23日に「行列のできる法律相談所プレゼンツ『カンボジアに学校を』完結ＳＰ」を19時から3時間半放送しましたら、21.3%という大変高い視聴率でした。カンボジアに新しい学校を建設するという社会貢献の役割を、テレビの持っているいい意味での機能を使って果たせたと思っています。ちなみに、第1回、第2回のオークション売上げ総額が約1億7,000万円と、多額の資金を集めることができました。

それから、先述の「人生が変わる1分間の深イイ話」は、まだ放送を始めてから一年も経たないのに、非常に好感度の高いバラエティとして視聴者に定着しております。10月期の平均視聴率が12.8%、11月は三週連続でフジテレビのいわゆる「月9」の平均視聴率を抜きました。これが、四冠王を達成する上の大きな要素になっていると思います。

昼帯も「おもいッきりイイ！！テレビ」が先週、週間平均視聴率の最高を記録し、月間平均視聴率も最高をマークしました。「情報ライブ ミヤネ屋」を含めて、昼帯も非常に強くなってきました。

記者：年末年始の番組編成の方針と番組について紹介下さい。

室川取締役：レギュラーパン組が極めて強くなっていますので、そのスペシャルを中心に年末年始は編成していくと思っています。

例えば、「世界まる見え！テレビ特捜部！！」や「人生が変わる1分間の深イイ話」などを拡大版、スペシャルバージョンで確実に視聴率を獲っていくということです。

それから、年末年始は恒例の特番があります。例えば「さんま&ＳＭＡＰクリスマスＳＰ」や、大晦日恒例の「ダウンタウンのガキの使いやあらへんで！！」、「はじめてのおつかい」、あるいは「石田さんちの大家族」とか、「世界記録」など年末年始に放送している恒例番組を揃えます。当然ながら、「箱根駅伝」、「高校サッカー」という大きな番組もあります。

あと、11月上旬にザザンオールスターズの楽曲をモチーフにした「波乗りレストラン」というミニドラマを異例の編成で放送しましたが、非常に高い視聴率を獲りました。また、3月放送の「東京大空襲」という開局55年スペシャルドラマのディレクターズカット版、スペシャルバージョンを編成しようと思っています。つまり、優良コンテンツをもう一回リユースするという形の編成も

考えています。

1月期ドラマは、火曜22時は、「神の雫」。主演はKAT-TUNの亀梨和也さん。ワインをめぐる人間模様を描いた大人気コミックで、韓国でも大ヒットしたものをドラマ化します。韓国ではヨン様が主演するという話も聞いています。

水曜22時は「キイナ」。これまで「ザ！世界仰天ニュース」とか、「特命リサーチ200X」という番組がありました。番組内で実際に起きた不思議な事件などを取り上げていましたが、それを題材にして、菅野美穂さんが女刑事、「不可能犯罪捜査官」となり不可思議な事件に取り組んでいきます。バラエティ番組とドラマのコラボレーションというか、リアリティのある不可能犯罪捜査官という形でドラマを作っていくことを予定しています。

土曜21時は、「銭ゲバ」という、不幸な生い立ちから銭ゲバとなった青年が、金まみれの世界で生き抜いていくサバイバルドラマです。主演が松山ケンイチさん。原作自体は1971年、週刊少年サンデーで連載されていたコミックです。

3. CWC、来期のプロ野球中継への取り組み

記者：サッカーの「TOYOTAプレゼンツFIFAクラブワールドカップジャパン2008」（CWC）、それと来期のプロ野球中継に対する取り組みについて教えて下さい。

久保社長：CWCは、今年も日本テレビがホストブロードキャスターとなって、全8試合を独占中継します。開催は、12月11日から21日です。今年はガンバ大阪の出場が決まり、日本のサッカーファンにファンが多い、マンチェスター・ユナイテッドがヨーロッパ代表で出るということで、大いに盛り上がりを期待しています。

今様々な形でPRしていますが、ぜひともこの真剣勝負の世界レベルの試合を大勢の皆さんに競技場、あるいはテレビを通じてご覧いただきたいと思っています。

来期のプロ野球の中継については、相手のあることなので、現時点では触れるのは勘弁していただきたいと思います。

記者：巨人戦は、今シーズン最後の方の試合は、結構視聴率がよかつたですが、中継の延長はなかったと思います。来シーズンはどうお考えですか。

久保社長：その部分も含めて、様々な話し合いになると思います。

4. 営業状況及び放送外収入について

記者：最近の営業状況と、下半期の見通しをお願いします。

久保社長：直近の営業状況および下半期の見通しを一言で言えば、タイムセールス、スポットセールス、ともに厳しい状況が続いている。景気動向を敏感に反映すると言われているスポット収入については、私どもも非常に厳しい見通しを立てていますが、その線に沿って動いていると感じます。しかしこれまでは、経験則や業界・広告会社との話し合いの中で、大体この時点になると年度末までの感触はつかめていたのですが、まるですごい霧の中にいるように先が見えない、という状況であり、その意味でも非常に厳しいです。

一般論としてお話をさせていただくと、企業の経営環境が厳しくなると、最初に節約するのが広告費、交際費、交通費と言われています。しかし、企業にとって優秀な人材を確保する上で、あるいは消費者へのブランド浸透を図る上で、一定の存在感を示すということは重要であり、そのためにも良質のテレビ番組に提供を続けていくということは非常に重要であるということは、全く変わらないと私どもは受け止めています。スポンサー各社もこれはご理解いただいてはいるのですが、具体的なお話になると非常に厳しい状況が続いています。

記者：今後の対策は？

久保社長：収入が減る中、いろいろと策を打ち出し、着実に実行してはいるものの、他に収入を増やす道は簡単には見つからないという状況であれば、支出を削減するのは、極めて常識的な選択手段です。最大の支出である番組制作費について、番組の質を落とさずに、いかにコストコントロールするかについて、一段と厳しい指導をしています。そのノウハウは詳しくは申し上げられないのですが、すでに制作費を削減しているにもかかわらず、視聴率は改善してきています。ゴールデン、プライムだけでなく、全日の視聴率の改善も進んでいる、実はそこにも工夫があります。

また、諸経費についても、大半が実施済みではありますが、さらに数値目標を掲げて、日常的な経費も厳しい削減を進めていきます。

コスト削減については、最初に打ち出した目標は、一律3%の削減でしたが、実際は各部局でそれを上回る削減の成果を出しており、さらに、部局によっては倍の削減率、あるいはそれ以上の削減を目指して全社で取り組んでいます。

記者：視聴率がよければ、スポンサーがつくとは必ずしも言えないという話も

聞きます。番組づくりにどのような工夫をしているのですか。

久保社長：視聴率の改善、向上は、私どもの収入増にとっては必要条件ですが、それは十分条件とはいえません。コストコントロールをきちんと効かすこと。それから、番組の質的な側面からも幅広い支持を得ること。できるだけ幅広い視聴者層にご覧いただくこと。もちろん番組の内容によっては、若い人向けとか、幼児・子ども向けという番組もありますし、主に高齢の方にご覧いただく番組も、もちろんあります。それらもバランスが非常に重要だと思っています。

したがって、私どもが取り組んでいる視聴率改善についても、私どもはコアターゲットと呼んでいますが、13歳から49歳までの視聴者層の方にどれ位ご覧いただいているかという指標も1つの参考にして、番組の改善に取り組んでいます。

5. 放送外収入について

記者：映画など今年の放送以外の収入の総括と、来年の目標を伺いたいと思います。

久保社長：冒頭に申し上げたとおり、日本テレビは、番組を放送する収入と、それ以外の収入のバランスに改善の余地があるので、収入のポートフォリオを変えようと努力しています。今年も映画、通販、DVDの販売等、放送外収入については、かなり積極的に取り組んではいますが、前年があまりにも調子がよかつたので、そこまでには至っていない。ただし、方向としては間違っていないと思っています。下半期は、この後続く映画が、どれくらいヒット作品に恵まれるかにかかっていると考えています。

島田洋一常務：今年の総括、まずは劇場映画からです。7月公開の「崖の上のポニョ」は現在もなお全国で上映しており、皆さま方から大変なご支持をいただき、すばらしい成績を上げることができました。「20世紀少年」は三部作で、第1章はほぼ一般公開が終わっていますが、当初の予想を上回る興行収入を上げています。これから下期に向けて、12月6日に公開するのが「252—生存者ありー」、年末年始にかけては12月20日には「K-20 怪人二十面相・伝」を公開。その後、1月31日には「20世紀少年」の第2章、これは第1章を上回る面白さという前評判ですので、ぜひご覧いただきたいと思います。年末から年明けにかけて公開するこの三作品にお客さまがどのような関心を持っていただけるかにかかっていますが、全力を尽くしていくつもりです。映画全体のムードと

しても、お客様の目線が邦画に向いているようで、フォローウィンドが吹いているという感触を持っています。

通販事業も一生懸命取り組んではいますが、今年は、これまでのところ、あまり大きなヒット商品は出ていません。ただ、ビジネスとしては堅実に実績を上げています。

6. きょうは「デジタル放送の日」

記者：今日はデジタル放送の日ですが、デジタル化に向けた今後の取り組みは。

久保社長：2011年、平成23年7月24日の地上放送のアナログ停波を実現するために放送事業者として最大限の努力をする、それに尽きます。1月12日から、アナログ放送の右上には常時「アナログ」という表示を出します。画面を通じて告知することが、一番効果的のようなので、引き続きあらゆる機会を通じ告知に力を入れてまいります。

(了)